



後撰和歌集
上

特別
84
8099
2(1)



春無花散花散花

春弄上

三月一日 雨降りて天は曇りて風は涼し

きんぎょの上の海

藤原氏の御代

春風吹く人の衣を吹く花散る

春の日の光

春の日の光を照らす花散る

藤原氏の御代

春の日の光を照らす花散る

後撰和歌集卷第一

春舟上

二月一日二條のきさの文光とありさねのうら

きつ月を海よりく

藤原敏行朝臣左近中将右兵衛督
按察使員外男

春雷は人のさる衣の未だのききにきりとはとありさねの

きつ月を海よりく 九河内躬恒

春のうらみはさる衣の未だのききにきりとはとありさねの

藤原成成大貳執前守平基行息

春のうらみはさる衣の未だのききにきりとはとありさねの



あつ人のもとふ新集の女の伝き傳る月日むす
あてじ月うけのりあめまゆりこれきりふ
ぬれ方傳て 一人あつ

あつ雲うう志傳ふききぬれ方あつあつあつ
朱在院あつ日いたるゆきりにさつあつ
ゆきえけうまつて延文朝臣あつあつ

大太臣
清頃云号小野宮太政大臣左將
天祚元年五月廿日薨七十二

おをいさわれもあつあつあつあつあつあつ
院あつ

表にうへあつあつあつあつあつあつあつ

子あつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつ

一人あつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ
題一あつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつ

一人あつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつ

何そふとて

初め親王

建武親王廣寛平才十
母京極淨息女

はなはな ちかとの花かたはゆくとし梅がけといともあふふかむる

ヤミヤミ ちか喜のちとて 紀友則

あふあふ吹きさる春風や池の砂とさるあふかむる
寛平御時きさるあふさるあふあふ

よこ人しる

ゆく風やまらるあふと昔つん枝よさる花嘆よき
あふすけりあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

くらあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

みけ祿

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

意賢王女

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

よみいしらす

このふれあそびは喜ばれ若ふふけぬをよみしに

とららば

用院左大臣

冬彌九大臣三位
三位右大臣内膳男

を思ふにわつものな梅花は良者に我や衣をめて食

お裁よ紅毒とて又り喜となく笑され

春原色補初

今中納言左衛門尉
承平三年薨 利基男

宿りくうけでうぬいひあけまりをぬよのこあらぬ

延新の御時ありしなふそそまうけり

きりしはらゆ

喜あふまじいよふり久さう月れらるる花やゆん

お好御時みはしおふあついでるさあまのむ

うとちげきそひびんせき観ふとたけいそあ

花人あとりくゆるり十二首うら

尺は祢

いせにも春のひらふさめいしきうらむれ山をさあ

人あつてふつううら

伴観力

おむとほむ神つたふらぬいきは涙をほめたり

人あつてふつううら

よん人うら

喜たりてわづらふのめりなりあひのつられ花をさる

影一花巻

百景
日々にいみじくも梅をいもふ人原をいもふ
きてみ来人もあらず我宿れ梅のつむ折つらとん
おのの折れくしてん梅をわづらふ人のさそをかんぬ
吹風ふらちをあらたし梅花のかり衣のいよやん
ころやこ梅のつむむしつる者よ海月をみまうふれ
梅花をいもふいもいもいもいもいもいもいもいも

とせいの海り
号良也期信

いそぎをいそぎにいそぎにいそぎにいそぎにいそぎに

おとこぶつとてやうにいづら

よかん人さる

んそておろくはあれ毒花をいもふとふふふふふ
さびをいもふけいふ女のいもふはよりいもふ
くせといふらう又の年をいもふあつた
今あつたといふ海をいもふいもふいもふいもふ

頭一ら巻

梅のいもふ吹く風をいもふあひんやあつたむ
さるあつたはあつたあつたあつたあつたあつた
かたしと雷はつとつとつとつとつとつとつとつとつ

音もいさよし葉もぬきぬきとわたりていふ事すさめぬ
雪も啼つるよおめゆきとわたりて花ありとわたりて我もさびし
花もふもまよひつるよおめゆきとわたりていふ事すさめぬ
老うな山田の海もあつくつじと雪にけしき今もかた
あいらりて竹もさうらの葉も田もさうらりたり小梅の
木竹なりこも花もあはれあはれ時ありあり竹もさうらり
こといゆさうらり花もさうらり竹もさうらり

朱雀院兵部卿世此み
寛平五年
延長四年九月覺

梅花はまはさうりに成ぬんだのり一分とさうらり
也

紀長谷雄朝臣
延長二年三月廿一日
中納言三位彈正右衛門督

春もふくも花梅や白くんとさうらり
さうらり目事のほけてありとさうらり

いふ人さうらり

春もあはれらつとさうらり
かゝいす人竹もさうらり人のあはれもさうらり柳をさうらり
あいらりて

みゆ録

いもあはれさうらりさうらり
花のさうらりさうらり花もさうらり

切上是刻

あいらりさうらりさうらり

五十七

たのしみよ

藤原雅正

花の色はらうぬはより喜ぶつねに
紅梅のむとみく 見はれ

これの井ふ糸をはて梅の花を
かきこねたもかしてさけはる
よきれちりけと けし中

あなはの毛をぬん梅むらうふ
急須胡匠の福をのまよ
とせくらけら花を
枝とたりてみよ

ゆげは

延元三年三月

春のよに咲ゆり
まゝめて宰相よ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

後撰和歌集卷第二

春奇中

年たいてのり梅花うぬくあふゆら此春行ふ可

ありとく

藤原扶幹朝臣

在大年号人位三位大納言
按察村松男
天慶元七月薨

うぬく花散らむしうもふみ咲らりみまはよこい花よ

祢やのまみ竹あり可よ屋とり竹とく

藤原行衡朝臣

延長十六年乙未七月年号人延長三
日十月中和八年甲午高亮
兼平四乙未七年乙未高亮

竹とく秋床神さき鶯の鳴とまきけと胡いせと山

屋まとのうらり山と海りて

信正画眼

良岑宗貞朝臣左中弁右中
右大将安世男 号松山
貞平二年乙未正月十九日薨

ととゆら山多るゆらむうぬまむ花よとる人そらに

花山とて道信さけそらうかろわりふ

素性法師

雪はいと伊人水たふゆらたれゆら梅ありてかえん

梅ありとさゆらと折てさもたりのつらうそら

ゆられハ よん人しと山

梅も多しゆら花枝た道とがえんふそらと海りて

ゆら 伊勢

みぬかたかろ人そらと移ゆらさ身にかとつら花ありあそ

梅花とよゆら よん人そらと山

く風とあり此山のあらしをいけくそ方ちりこぼして
帝裁よ竹乃ちりふ小櫓かこえんらるるを見て

坂上是則

さくらをさうくたてし是行のよありはふらりも

題しらすに

よかん人さるる

櫓にありしあらしをいけくそ方ちりこぼして

貞観乃時中のついでにさるる

河原左大臣

献入奉
淡海天皇の子

さくらをいけくそ方ちりこぼして

家乃ちりふ小櫓かこえんらるるを見て

ゆいづきゆかり

菅原左大臣

系統は善男
延元元年右大臣三位
建曆四年九月贈左大臣
三位十月贈太政大臣

櫓にありしあらしをいけくそ方ちりこぼして

善女さるる

伊勢

善柳のいけくそ方ちりこぼして

花乃ちりふ

元河内躬恒

あいらしてらるるをいけくそ方ちりこぼして

かゝる鳥さるる

よかん人さるる

あいらしてらるるをいけくそ方ちりこぼして

朱雀院のあらしをいけくそ方ちりこぼして

さくらをいけくそ方ちりこぼして

おののけ

大將御息所

三葉太右衛門女御子女流
仁善子身 文更

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

さうり次

よ刃人毛

あつてい

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

さうり次

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

さうり次

さうり次

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

さうり次

藤原御親臣

後小隆太右衛門
天曆三年指中納言左兵衛督

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

さうり次

さうり次

さうり次

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

さうり次

まはさうと裁おつけを機を人しておやいさうんをさひ

小貳よりうつけ

藤原朝基朝臣

丁曆六年春改任三位三
右大臣男
在和三年中御之康保三

叶しそあせむの威よほしきまはれにむくぬ山よ入やとらじ

を

あふふとぬふのよこしうに花とらめ人さうん

題しうけ

交道高風

去地の玉藻よりそ智らりあへのとれは心をもすの

寛平御時花のそ新よこめてみせしうふをよみ

てきてまらまといせらまあれ

存永貞風

正六位治平
道成息

嵐の花れうら葉あふの新をほくみりさ

是らうけ

よん人あらす

まふれをふりまらむの毛程あうけ花とら思入

京極のみやとんあよとらりゆら

春霞たりてを并にありせくありうをさふゆらたり

題しうけ

秋のまねと志サくわめる喜れよの着とらにい事うけ

おれいふたこのもとい言ひ事ありてさきで

あうたぐ一そりてりてはうとひとて標をさ

下かひよよとらゆら

この宿の標をさほくくもむのゆりいんも行くやん

わかれのよけり人のあはれはなふとて

秋祇伯五位下
か神とのあはれ人唯高秋子

あはれの花のなるにさきくはくはくあはれなるをよき
ふたふたさきくしてさきくあはれなるをよき

さきくあはれなる

わが宿の花のなるをよき鳥のあはれなるをよき
云生志界のた近のけいあはれなるをよき
ゆきりけりてふあはれなるをよき

さきくあはれなる

あはれなるをよきあはれなるをよきあはれなるをよき

後撰和歌集巻第三

春部下

権大政大臣あはれなるをよき

天曆二年大御言九年右大臣天徳元年右大臣
きくしてはくはくさきくあはれなるをよき

藤原頼忠別後母
大御言源氏女
五位上宗武妻衣

あはれなるをよきあはれなるをよき

あはれなるをよきあはれなるをよき

あはれなるをよき

あはれなるをよきあはれなるをよき

あはれなるをよき

糸少之がめいふさせしと栞をいふしこいふ常也とあは
びとら次

なほ葉花のさけりいふていふ事なるはくはしきか
胡志船長こまりふゆきりけり此いふうらり花

いひつらうきり 仔細

かたしふなうむとみりしはこいふ風の吹まこいふ

女はけりしげり よん人さし次

まの目めいはいふしと人のうらりは秋やきり人

顔し次

よきまも花みりていふとそめくわきしに記すは
いふ

風とよきまらして花のうらりいふしこいふうらりうら
費を

あまうらりあすいふうらり女はすしにあまうらりいふ

をいふらとあまうらりいふしこいふうらりいふ

こいふあまうらりいふしこいふうらりいふうらりいふ

目し次

山たうと霧散をけてちつとむと看しやよき人さしあは
く風のうらりいふうらりいふうらりいふうらりいふ

清原市やめ

彼人きてそむるをじ蛇蛇めくるを井このやまよき花

即信 敦忠一男 天徳二年 苑人 お将右平

助信の母月御りてのりか花よ敦忠の信のまより
かういふくふくろ花のらうけりりふまより木
乃そしに筆れか家れ命をういさうさる

よん人あさ次

酒の風ふまうせん様むらうにをそふよこまのり夕月

や

敦忠朝臣

平俊右衛門男三任号中院 天慶三年秋左平 五年 隆中朝臣六年薨 六八

風もあふ海をんゆら花白いあふぬよらうはうかり

桜川とら海ありとまて

ゆらゆら

ちひりもまよた道は桜河花の波はさゆくふま

お裁小山吹あふあえ か神すけり朝臣

つらつらひの家歎そのやうをるもむらうさるあ

はら

在原え方

一もふあといさぬ花あまむらうに人あといま

寛平北河時様乃ものあありふふあれ方の

なれえ

藤原敏朝朝臣

まゆ花の枝らりあまのりあまのりあまのりあまのり

いはいらう國は海よりあまのりあまのり

よん人あさ次

昔も後ろ方合ありて

山裾に花のこぼれはつゆもも顔のまをさすはりのり

山吹のつとみえき ちりやみ

白きとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

信正魚眼

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

三條右大臣

定方右大臣贈一位小一条
内大臣高春男 兼平二年四月

つとみえきつとみえきつとみえきつとみえきつとみえき

急備朝臣

あまのつらぎにまはるる波のたらしをふるてしるすたれ

しるすたれ

こころせとめつともあはれなりおまはるる人をもよほしと思

こころあえまゝしてあそい物さりなりし物さるる福

来ゆけよけしはゆるこころりてまらあゝあゝ

三條右大臣

こころあはれなりそし物さるる福をこころりてまらあゝあゝ

急備朝臣

一采此に種をかふる春のまをけつるあみまをじやえ

あみまを

初りけりそし物さるる福をこころりてまらあゝあゝ

あみまを

あみまを

うしろあはれなりそし物さるる福をこころりてまらあゝあゝ

あみまを

みつね

あみまを

あみまを

源仲宣朝臣

あみまを

在馬橋延長八七初
兼平六四位大納言
貞恒男支考丁貞孫

ゆき花をけりかきまはるとよりきあはれにほぬ
をよしのほこりふまへり

はらふね

初めよ成もやすらしたのうとまはれりいふおを
おろしとあまよ へん人あま

みはね

くれてよあまといふはまはれりいふおを
をよしのほこりふまへり
しんじてのうかたはくふねのきゆり

しんじて

又もいふ時そなたのあまはれりいふおを
つゆ来ておろし一年の秋身まへりいふおを

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 花, 月, 雪, 春, 秋, 冬.

後撰和歌集卷第廿

夏歌

三十一

よふ人毛

三十一

空母りなむ衣よすのゆきとまほふ人毛かそくさあはり
 卯花のさげかきぬのしほのこし種をたけあめく時
 卯月さらももたられはる人毛あらくゆりて
 かあはせうせいのけうてむし約けいにとあはれ
 郭らきぬ^か垣にらあまらるる体よのこ給来^かこぬ
 せー
 海らきぬいさまらるるはさくこつとあまらるるあたらん

物といふくはきり人のつまなくほまれよりあか
かき糸の卵をとりてこしきしてほきり

うらたきあかきひのうあはれうと力人の毛たき
か

や

うたものこしきり卵花あさけかきねもすの糸
ま

卵花あかきねあかきりて

時よりほきりきりてみるまてはほきりたふさひ卵花

こもたられあかきひあかきりてほきりて

とらあはれあかきひの卵花あかきりてほきりて

卵花あかきりて

卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて
卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて
う月ほりの月なりあかきりてほきりてほきりて
あかきりてほきりてほきりてほきりてほきりて
女のりてほきりてほきりてほきりて

卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて

卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて

卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて

卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて

卵花あかきりてほきりてほきりてほきりて

そとく

藤原経朝

藤原経朝 藤原経朝 藤原経朝

そとくはあまのついでに

志生忠岑

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

左門格作 伊予守連を自

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

秋のつとまをよきは時をたぐりて終るる此のなりとせしめ

桂乃月敷慶記に此の月をたぐりてとてしむるをいふ

かき入此神よつて

はく先と毛かたれは物、存忠乃身らりあまのりて

歌しうし

まほあ海にたぐりて夏乃秋あはれ月のみしむる

月あはれ乃らあはれとありて由るありとせむ

まていぬうしむる方々のわたり

はく中末

祀をちりて月をたぐりてあはれとせむるもゆりて成よけり

や

春永雅正

なまのりとも神歌もいふる物うらなひをいふ

題しうし

よん人も

なまのり身と手記をたぐりてあはれとせむる

夏乃月なりあはれとせむる

あはれとせむる神のたぐりて月の頼もや秋とせむ

なまのりもいふしあはれとせむる

乃て 古人六月中多し河原修版
不浪晦日也

かき入る水屋すたてて照月とせむる

みあ月をいふありとせむる

古くあまの河原とありるなりけりのみを記

河原の記

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

後撰和歌集巻第九

秋寄上

道行のわみこは家乃ち合のこ^り

よ丸人志の歌

依も毛風乃涼しく成りぬる秋の日はなほもいかり

題しつ歌

さらばあふれとくけりて木葉の舞風やとて雲をよみ

地をいづけりてあ秋立の人よはけりてさる

そのあつたきと道行の舞風はなほも暗ぬ秋乃ちけり

たふととてゆきとるさる

いとくもあふ高う萩の葉に好しけしはる風のよ
歌一う答

秋風のら吹そひる中書、愛ふうあそわひうらけり

大い千里

病のひたりと月とまもあはれ物とあはれ秋風のまよひ歌
女あをいへるも月よりあまのいひとをゆるきり

いみ人あう歌

あはれとあはれ風吹吹舞いふあはれえうたりと秋の
歌一

秋葉とあはれ風吹吹とあはれうと一帯葉をうらね

在原葉平朔夜

源昇朔夜時くゆりかうひきりあはれあひ月乃
いみ日はりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
とあはれうとあはれあはれ

閑院

貞元親王元 女と奥書

あはれとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
歌一う答 よあはれ

あはれとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

源中心

親帝の女苑が補子年子
を後右大臣孫

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

たれふことゆて よん人あう候

秋風のあけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

秋風あけし

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

葉平の候

秋風のあけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

秋風のあけし

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

秋風のあけし

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

秋風のあけし

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけしちりもやすしん七くあうぬ別の気とあつ

初冬あけし

初冬あけし

草のいふおのころおのころの秋のじよつ

露をありき

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "秋" and "中".

後撰和歌集卷第六

秋 中

延喜の御時ふ秋のきりけは遠きまのり

紀貫之

秋霧此のけりたはる山をわたりてはるをみまはる
花はかき出れぬを好のり香にまじりてはるをみまはる
寛平御時きこのまをみまはる

よみ人あはれ

浦のいづれにけりてはるをみまはる
あまのいづれにけりてはるをみまはる

存承奥風

心づくにほろ名ふらぬ女書をもとめりて花づくに心電
よみ人しう決

秋の夜は病よとく病女書をもとめ命の心電うては
ととる命もその心電の秋よの心電いしと心電
その眼をその心電ふゆふ小定帝は心電うた
その心電ふゆふ 近江文家 源国子右大臣御女
生時明并内親王女

昔も心電いし神よは心電を心電うた好の心電いし
神心電いし 延喜御製

心電いし神よは心電いし心電いし心電いし心電いし心電いし

心電いし神よは心電いし心電いし心電いし心電いし心電いし

延喜御製 寛平

心電いし神よは心電いし心電いし心電いし心電いし心電いし

心電いし神よは心電いし心電いし心電いし心電いし心電いし

心電いし神よは心電いし心電いし心電いし心電いし心電いし

大楠 延喜御製
源朝臣女

より此ふからむを女高むのみよふとてまはる

又

右大臣

おさめ原露れおのくふきれはまはるもはるあり

也

太極

今もや打さけぬるを白露れはまはるもはるあり

あしよりてゆきり女高むもはるありとてまはる

元はくともはるありとてまはるありとてまはる

このまはるありとてまはるありとてまはるあり

よみ人志らば

白露のくはまはるありとてまはるありとてまはるあり

也

伊勢

公の身がまはるありとてまはるありとてまはるあり

あしよりてゆきり女高むもはるありとてまはる

よみ人志らば

人をまはるありとてまはるありとてまはるあり

人のまはるありとてまはるありとてまはるあり

えはまはるありとてまはるありとてまはるあり

中宮宣旨

これ高むのみよふとてまはるありとてまはるあり

也

伊勢

高きよふあつて秋分までいかにむよんを

秋分

よん人

秋の半と云ふふりとも秋分を秋分は秋分を
おぼしむとも秋分を今より秋分を秋分を

右大臣

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分

よん人

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分

よん人

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分

秋分をぬり身と云ふ秋分をぬり身と云ふ

秋分

中葉のちり折てかきしむるおく麻さの流於のめさ疾

じ神ゆきの物居 七弟之更
是は志取ま子

この高れをのめさ疾らつぬぢりたひむ人やく年と魚乙

白露のとうまくらしと秋をたたりてはゆよ我やくん

年の海そりふきろこはうまこけけりひてま

わさ瘧のまゆく秋とらうよあまかきてむそふにき

秋の田はりのの唐のまはとけりつるまも病よあまら

天智天皇御製

秋の田はりのの唐のまはとけりつるまも病よあまら

秋の田はりのの唐のまはとけりつるまも病よあまら

後人あまら

この神は病をとくけりて河をたきと流やこすらん

秋をたの技もさゆにありゆく白露をりたけけぬを

とやまをたけりてのまを病よとけりてむあけぬを

延喜時方よりけりて

延喜時方よりけりて

この神は病をとくけりて河をたきと流やこすらん

秋の田はりのの唐のまはとけりつるまも病よあまら

文屋別康

この病は風吹く物たけりてあまら

そくみ終

秋の野よとくもく霧をせ物れはまやとけいとねる道
題一う次 小見人毛

そくわふふ子種の色よたか物と田霧とありと命志いぬん
白むり秋の本葉に命とわつとみゆり霧のよるほめゆり
秋の野よとくもく霧のきこゆらまよおととよしてそく
あつ衣神くけりまてとくあつ我身と秋の野よとくもく
大定にほく神ひらあつあつはかたしく霧やとけく雲ん
朝よふとく霧神おとてあてせれう三寸の海をえか
秋のうとくもあり つくた青

あつ衣神くけりまてとくあつ我身と秋の野よとくもく

あつ衣神くけりまてとくあつ我身と秋の野よとくもく

小見人毛

秋の野よとくもく霧をせ物れはまやとけいとねる道
神のうら月の光は秋よとくもく霧をせ物れはまやとけいと
秋の夜よとくもく霧をせ物れはまやとけいとねる道

小野義枝 大田記述範男

秋の池の月よとくもく霧をせ物れはまやとけいとねる道

あつ衣神

あはれ海よりよき月とまきり海をくるともわたり
是貞のみこに家より命よ

傍人一り決

輝る月の光ひりきよき月とまきり海をくるともわたり
秋の月つ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり

八月十五夜

春永雅正

いそぐ月よ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり
よか人一人

月影あけし秋の月とまきり海をくるともわたり
月をみく
紀伊光朝後
長秋
春永雅正男

いそぐ月よ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり

よか人一人

いそぐ月よ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり

よか人一人

いそぐ月よ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり
秋風よ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり
輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり

よか人一人

いそぐ月よ輝あけし秋の月とまきり海をくるともわたり

よか人一人

く風はゆれきよのよむしあけのけりかよあうと日

こはさうりみこのあきさうなれう北平

秋の朝人と云ひあてしきくにかいあはれとけりあそび

霧をよめる 春原清正 紀伊守 徳田信忠

ねをむるけりまはせし白雲はらふにけりむをさし

八月十日 八月十日のあまのりうのあま

短風よとよひゆく月影とたりあうとそとれり寄

延秋時言りよきれそそまうけり

はらゆ

女房花よふ秋の武冠登ら祈りもけりまう

人よひつりもろ 愚賢主

あき霧はあけゆく秋の女房をさる人やけんよと

歌あはれ 小主人

女房花あはれとよひしきくはらけり居れ給はま

とよひしきくはらけり居れ給はま

女房花よふ秋の武冠登ら祈りもけりまう

母貞之

あき霧はあけゆく秋の女房をさる人やけんよと

あき霧はあけゆく秋の女房をさる人やけんよと

小川

七夕にせらる物る女高むあまのりやあ母のあ

よみ人し原

秋の聲ふらばも福の女高むあまの若きいひは

女高むあまの船相書とりまにやとて誰と納ん

前載よとりんたへしゆんかあま

とみまへ白布りなをみつたわむらくは解りき

とまひいづるあまのいづるまひいづるあま

とたりてあまのあまのあまのあまのあまのあま

三條右大臣

女高むあまの若きあまのあまのあまのあまのあま

手らるあまのあまのあまのあまのあまのあま

女高むあまのあまのあまのあまのあまのあま

ふたむしゆらり

法皇御殿の家のおまをうけしは

つらぬきて

松田左大臣

仲年益左衛門
照宣云三男

女高むあまのあまのあまのあまのあまのあま

せし

伊勢

をこあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまの

海樗和歌集卷第七

秋下

秋下

よみ人毛

ちうせう

春の海より人かきたりけり所をわがふれり秋の
秋風よいとよしの花を落しけりよもそ生る

寛平御時きとりのまは弁合

在原棟梁

在原御時 棟梁
寛平御時

と風をよとよしは秋風の吹くをさく枯れる

秋下

よみ人毛

ちうせう

秋の風よとよしは秋風の吹くをさく枯れる

秋をよとよしは秋風の吹くをさく枯れる

秋下

よみ人毛

秋の風よとよしは秋風の吹くをさく枯れる

秋下

秋の風よとよしは秋風の吹くをさく枯れる

よみ人毛

秋の風よとよしは秋風の吹くをさく枯れる

秋下

秋の風よとよしは秋風の吹くをさく枯れる

新しうす

梅風よき哉とれは心無き神也なる人の着るよふ
手はけし留るる日せら翁のおれすと思ふと
中よりありとてかへらも様あしやう結しに
林よに積るる雪のぬきと發まよそつかりし
ひすふふと思ふとぬきふとけりか
人あかりなきふりてし

凡川祐

年よといふは後事とてぬ屋のふはらうや
を海よといふは前事とてぬ

よん人

舟中の河鶴とてわらうさうの木すゑの
悪補胡臣たをわらうさうの馬じ

延喜十三年九月 延喜十三年九月 延喜十三年九月

おゆりては日おふくといふは
おゆりては日おふくといふは

有原忠房の長

新しうす
在原え方

破とよの帯を結し程多しといふは

よ見人しう次

あさけ野のあし赤れこもみゆかたをわらわのあし
秋の野ふらなり露のよれつあはくも常葉のよかを
いふまはく口まきあつとむ能れかゆらるるをなまけ

紀友則

若年とて唱そ志ぬこし枯骨よなまこもや麻あはれ
よ見人しう次

後三つとよきあはれよはるのあしこもはひたり
うらとてあしをたのびたのねをこも秋の風ようは
神在冬初法本同神多も秋の山をあつとあつとまらたこもをみつん

いもろひもあつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむ

雁がたてとよきあはれたの露あつとむはれあつとむ
みまこしに秋ももたなりあつとむをみまこしに

源宗平朝臣

あつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむ
とらかろとらかろとらかろとらかろとらかろとらかろ

よ見人あつとむ

あつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむ

題しう次

え方

あつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむいもろひもあつとむ

秋意はそらのかげにみちの葉もあつたけくさつたあり
かた山よこ中とて 素性法師

あつた山よまの秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつた

こもりふしより人結きつたれ九月八日伊弉諾家の

菊よわびをせよきつたれけさのけさのけさのけさ

てうのきつたて 伊弉諾

かた山よまの秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつた

てうのきつたて 藤原雅正

秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

九月九日よきつたれなつたありけさの

秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

菊のよまのきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

てうのきつたて よん人よ

秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

名あつた長月よこ中とて紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

てうのきつたて

秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

かた山よまの秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

秋のきつたれと紅葉あつた秋のきつたれと紅葉あつた

月よまの紅葉のちのけさの

きいてはらぬうてまゝのちり

平伊登別後女 命云々唐子

知つては我をいふはくは白蛇のたふれふふあめん
かきふけたはこれ秋とあつりうらに

じうの飛鳥殿のあこい

舞を此新しもうまれよくさくさかかりや我とくぬにのし
ゆみらこいあはれとては女のものにうらて

深のうらま 想 持し 三輪寺

衣ふと海よあつり口神と知れりみらとては建てはまうり
新あつす よかんも

て舞月の袖ももよにいわけみちちの雲あまのあみりか

なまれ内宿もあゆ別後女といひかよはけゆるみ

とらてあまつしと由のよはらうて

あまのあまてふりみりて成よまじなみけは校よこれ

秋風とちりとうら秋とまじ物とらりかろあひふ

かりのあはてとらりあふれん

深のうらまの物 命云々唐子

あうらみかたもも鷹のいのちこりよあてゆく死ん
菊うとれなむらりそそ命のいのちけま

よかんから次

つらき病よとらふ花をてらふもさぬ人なれり
身のかりてぬいばむひたけさゆきちかき紀元
うをこしむと侍ふたこころひよとせむくゆれ
いぬ事小菊の花とわりてはけらうきり

藤原忠邦

お初言書と病子母
をばりぬ貞子
延元六年二月卒

枝を柔しうらふ秋の花をさへはひあくらぬて

や

友則

あはくまてよまひのふてぬむあれは世の好もをわけさる
延元の時時秋のころうきりされはきてはけり

紀貫之

秋の月をあげこりち葉はつらげさみえり
影し寸

影し寸

よかんも

梅風よほつとを眼ぬ鳥のこころうらまかたけらるる

たこの花うらゆむして菊ありけり

あひはほつとたりきれはむよりさくつはし

みねはわらむにけりさきくは花ありあめを露も

露も

吹風よあつすや秋のよは月のかつらさむいよく

あつらわらうたのあつらうた

紅葉はらう木もさききりあつらうたの秋ははらあ

炬^ヒとてつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
神^{カミ}月^{ツキ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
神^{カミ}月^{ツキ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
女^メとつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト

その^ヒは^ヒとつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
山^{ヤマ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
増^{ツク}其^ノ法^ノ神^ノ

神^{カミ}月^{ツキ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
十月^{ジュウグツ}は^ヒとつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
は^ヒとつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
は^ヒとつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
存^{ゾン}原^{ゲン}忠^{チュウ}房^{ボウ}朝^{チウ}臣^{イン}

神^{カミ}月^{ツキ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
大^{オホ}に^ニ千^チ十^{ジュウ}七^{シチ}

も^モの^ノ葉^{エハ}も^モ時^{トキ}を^ヲし^シ精^{セイ}ふ^フと^トん^ンと^トや^ヤあ^アぬ
神^{カミ}月^{ツキ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト

ち^チと^トや^ヤあ^アぬ^ニし^シ精^{セイ}ふ^フと^トん^ンと^トや^ヤあ^アぬ
と^トん^ンと^トや^ヤあ^アぬ^ニし^シ精^{セイ}ふ^フと^トん^ンと^トや^ヤあ^アぬ

神^{カミ}月^{ツキ}とつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
人^{ヒト}寸^{セン}は^ヒとつらむ時^トとつらむ時^トの^ヒは^ヒとつらむ時^ト
伊^イ弼^ビ

あつたはしむらひせしむらひ女

白くは若かりしむらひはむらひて今さらりてふくむらひ

若れあつてむらひをけりて

むらひ中ま

海をあつてむらひのむらひむらひむらひのむらひむらひ

むらひ 急備初辰

くむらひのむらひむらひむらひむらひむらひむらひ

又 費之

くむらひとむらひむらひのむらひむらひむらひむらひ

むらひ 初辰すけの初辰

年毎まむらひのむらひむらひむらひむらひむらひ

むらひ 初辰すけの初辰

身すむらひとむらひむらひむらひむらひむらひ

若れむらひのむらひむらひむらひむらひむらひ

あつて今すむらひもむらひのむらひむらひむらひ

若れむらひのむらひむらひむらひむらひむらひ

若れむらひのむらひむらひむらひむらひ

若れむらひのむらひ

かむらひとむらひむらひむらひむらひむらひ

天慶七奉教天徳四申言安和天徳元慶
仲氏初辰の初辰 小辰のまむらひむらひむらひ

流るる水はくさくさしてゆく
年増くさくさしてゆく
白根すくすく
白くさくさしてゆく
春はくさくさしてゆく
その地すくすく
うすくさくさしてゆく
この地すくすく
あつたくさくさしてゆく
あつたくさくさしてゆく
あつたくさくさしてゆく

あつたくさくさしてゆく

あつたくさくさしてゆく

あつたくさくさしてゆく
あつたくさくさしてゆく

海樞和歌集卷第九

恋哥一

かたうしとあいらりてゆきかへし
まへいさくくゆけし

深宗干朗伝

東海の中にあつてあいらりてゆきかへし
まへいさくくゆけし
かたうしとあいらりてゆきかへし

はつゆき

あゝ素とかなふうしむじわる建よしむをたを絶
絶

海の目もいかにしなまきりてはちくくはらぬ
なりふまじしいまの世か海にあらはれはたふし
ふまきりてはらぬか

まらぬ人も人よ人の世はうらむまきり
むしちりてはまきり人の世にふせとふし
うらむか

くまきりてはまきりてはうらむとては
存原かはらぬ 晴見

夕暮のまらぬまきりてはうらむとては
まきりてはうらむとてはうらむとては

うらむとてはうらむとてはうらむとては

林の奥の静けさうらむとてはうらむとては

人よらぬまきりてはうらむとてはうらむとては

由る名もあつたせとほまきりてはうらむとては
はとこれまきりてはうらむとてはうらむとては
まきりてはうらむとてはうらむとては

ながし河津とてはうらむとてはうらむとては

新編

三統志

六し屋のむすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

女のぶつうのまきり

一かんのくのまきり

まきりのむすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

女の

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

題のまきり

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

女のぶつうのまきり

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

女のぶつうのまきり

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

女の

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

題のまきり

むすひのうがよもまきけのむすひのうがよも

又にとし

今こそそのまをたれも白き其後まはるるをす

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

なり

よむかきおはるははるるまはるるまはるるまはるる

五番中法中同

公卿ありてはえおとほ御まら女の内はいつつ一方

贈大政大臣

平家流大政大臣時平大佐和
贈正信埃川大政大臣男
延長九年四月廿日宛可九

おはるてあひぬえた白むの涙も言ははらるまきりさり

やー 伊織

人より涙も言ははらるまきりさりおはるてあひぬえた

ねとこれさうしこおかういとむおたはけてつゆふ

しもははらりたれぬも又さこのこたかり若立りりさ

えおまらやふ 涙をれじかじとめ 涙頼

たはしもつらうう女計をわつ富らうなるを殺すてせえ

やー おつりのみこ

教慶二雨むえ
或る云字多佐皇子

甲斐の心もたて御部さすえうはらぬあねあつぬとて

えさかりに女よなひひさしつらうまら

さうみらのほしかり

ねあぬみじこれのねもあつ人志事ぬ喜び啼つたあ

いと志はひらう女よあひらういしておりかよつて

あひらうゆきれ くれのみこ

此志文者廿一二日及乃
号百文 延長年出家
延長廿二年十月廿二日宛

あつてははらう我はは知あうむらとんらりあわいん

女のおいらいり 昔草 草おあつてをてをてゆり

あつれ 見え人志事流

おはるはあまものうしあまを建らうらうき業れむあおあ

日下後より船に地をまわすところ後居るともなむか

とらうりあ

あはれむむの袂にふもつうけとまきふとくもも恋誠の次

身とよけくちの海にそあそあふ人ごうごうじとじと地

雲井ふく人とうひとこぬる我あふふそひのあふぬふ

人よけうりまろ

淨寺朝臣

系後右天弁中納言希男
天曆五年薨七十二

浅茅生れもの志の東志はすことあまりてかとうるあふ

か神人の不御さかん

魚まぬゆりむかかとうりあふこまはれはらるるあふぬ

ふふれ屋うふかこゆりなをまことしりあふぬ

よん人あうす

せう海よりてまあまうそく繩のあはれを我をゆとまふ

人よけうりまろ

あよらてゝ恋とてふ若をまねて涙よそむの袖のこけり

かくらつ物とまのせゑあふじとてはてあはれはつ病あふま

あひもせとがけこいもなぬ涙ありし時ふ事なれあにあり

恋あこしとらぬま物あかりきりかじしむすはるを恋しこ

女ももじつうりまろ

こいふあうれをのならせあふは恋とらうりまろ

みみはよむかじあは川は流れても人よまこじつうりまろ

後撰和歌集卷第十

恋奇二

女のりこふさうりて此のうき

藤原忠房朝臣

今もくばふさうりてある物とをわさうりてはれかり

生忠奇

元らのいさふさうりてはれをよふをさうり

きのうのさうり

さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて

さうりてさうりてさうりてさうりてさうりて

海ありた 中

海ありた 中

人さうりてさうりてさうりて

あつりてさうりてさうりてさうりて

さうりてさうりてさうりて

存忠忠房朝臣

かれぬさうりてさうりてさうりて

女のりこふさうりてさうりて

存忠忠房朝臣

あつりてさうりてさうりてさうりて

補文 一平補仁
と我 玄上息

驚ろぞ舟ふらして 心もよきまらゆら 我はれきたまうはる

あふかよはしきり女のこころ 一あひぬきまうてはらん

〜ゆらり 松中仙言 平時隆朝臣 兼平子松中仙言 天慶元薨 左右権記男

おんはらけは神もいかに なるめし人よとふふふそふそふ

おんいふふらけし あ〇一 一まらりついでい

つごのいびき 音なりついでい あ〇一 由もさなる

音〜なる 枇杷左大臣

在城うもれあふと 備わらふあも 備わらふあも ねみり

あ〜 伊勢

わたしたたのう〜いおれあせぬ 我を〜らあ〜ら

人あ〜い〜ら〜ら

源等朝臣

東海のみけり 舟橋ひくくのなむい 海なる人ひめ

人あつ〜ら 紀長谷雄朝臣

う〜てあるまあふ〜いもあふ 舟の程あ〜ら〜ら

女よけ〜ら〜ら よこ人

あ〜れんよとくもぬ〜い〜ら〜ら へるつる鳥の聲

兼もす〜ら〜ら へるつる鳥の聲

へ〜い〜ら〜ら

おろともあなをいふはしらう程はうらろ綿のきりたれ
おの女のいふはしらう程は

着ぶのいふはしらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

とすははらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

とすははらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

難解るからうひあはきくこのしらも枚をあらう

とすははらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

らうと美人はらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

ついでにあらう程のしらも枚の枚とて秋をみ取り

これに

存承にさうせ

と云ふ事なり。此の田舎浦より人海の故郷に
よひて、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
あちまのさうせ女も、貴之

あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
ものさうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

よらあ、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
大江朝綱朝臣 長秋天徳之靈三十一
玉園の男

あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

貞文親王 皇初代三子 母系孫仲統女
用院の三つみ 二兼平元之薨

不肖の女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

人を、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、
あつた、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

公を、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、さうせ女も、

橋公頼朝後

延長年中約延長三年
養年九而天慶二年四月
卒 度相の孫也 本公

あはれしきしつゆの鳥のさしにさうわたりつあふりし

はらゆき

すゑのしれはあはれしとふらむにむとえよせり

吾妻よつらむきり 鏡人しり次

みぬれふ年のふまにあふれやとふくとたぬあふ

ゆらりとむらあふつらけしきりきり

中ね文衣

香紙伊賀女

あふれふとぬれ物とむらふとえりこころとむらひ

延長御製

はら

うきあそびぬるるるるるまよひし物とふきり

新しき物

存原らぬ

北のり

東奥の宮本房男大

なまけていゆかたのあふぬれとむらふとやかきりたる

在原棟梁

こころをたぬれしころの白妙の深林抄をつとぬるあり

はらゆき

あふれふとぬれ物とむらふとえりこころとむらひ

坂上是則

あふれふとぬれ物とむらふとえりこころとむらひ

年いふとえりこころとむらひ

源一

源一の物語

かじりてよきしはよりや漢中より出たもよきぬ恋よきと
あつとわらふもよきとえりきりきり人ゆかりん

しるし

存永意前朝臣

鳥羽右大臣
延長元年

こころ海に危りありか知ありか心よきとん波のまを流
女のまにに流るるしるし

楊子神と此朝臣

實利大倉公
青利朝臣

流るるもよきしとてぬ海にわたり人よきとよきと

や

よきとよきと

か終てとなふよきとよきとよきとよきとよきとよきと
あふ

人よきとよきとよきとよきと

平貞文

なふとん今よきとよきとよきとよきとよきとよきと

や

あつとよきと

あつとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
女よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと

や

しるし

眼ても身をたつとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
あつとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
そりたりよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと

云生出等

何者れねたらりふら白波のうねりたりと云ねぬあるん
かこいぬもいりりふらぬいと命なれんあまのいりり
まゝ女まかりて くれんくは

わのむじたらりやいももあつたをぬれ若とてはは
や

雲日好のまよひは雲ちかて物とすも若とてはは
新しうら若

早しうら若とてはは云のむもや若とてはは枯とてはは
人ろを若とてはは 七五

なをむじたらりやいももあつたをぬれ若とてはは

いりり細良ふらぬいと命なれんあまのいりり

まのらあつたをぬれ若とてはは

いりり細良ふらぬいと命なれんあまのいりり

源清菴朝臣

とてはは又難の流しあつたをぬれ若とてはは

いりり細良ふらぬいと命なれんあまのいりり

いりり細良ふらぬいと命なれんあまのいりり

よん人あつた

いりり細良ふらぬいと命なれんあまのいりり

行方しうめとあるは女よほつていふ

源信明

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

源信明

存京より

信方お初言 信方男

よきははれはれとておのいふあひはせとていふ

大津のらあめ

白浪あふり破れはれとておのいふあひはせとていふ

源信明

信方お初言

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

源信明

信方お初言

いさくもおのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

源信明

藤原きよたか

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

源信明

源信明

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

源信明

源信明

信方お初言

おのいふあひはせとていふらとておのいふあひはせとていふ

信方

源信明

信方お初言

源信明

源信明

意物納後よあいなてはひりそあきらけ

あいな

きよたけり女母

母のさけぬる君や此のゆたなりふさけぬ妙なり

かゝるにりきりらんきりる金まきりて

有京ありのれ給

有是上野侍
右衛門左衛門男

あし時をそひて一糸もたなくあしくしく秋介の神

歌よら歌

久保子左

臣四位上孝持左衛門
侍子格守長秋吉人男

わらひをうまをそり身そりせむをいよあなをみか

志のしにかういゆげり女あそりかりさうたくと

くりてゆげりよすむらりきあのゆらりふ

りしうらみこ

あふよはははせむのりなまそいひのれ神をのれ

歌よら歌

あつうらみか

母のたむをいりし神のよけも人あはむむとて思

志のしにかういゆげり女あそりかりさうたくと

有京ありのれ給
陸奥守
連並息

ふらあふよははせむのりなまそいひのれ神をのれ

寛平此みしりくわらをせ行くらるる帰帳のめ

くろふのこんさやと現経てらくえやうせは

あし時をそひて一糸もたなくあしくしく秋介の神

小八條沙島前

まうはなけしうららきれとされわが我の言とてん
不^ちこののふつうきり

おた

わ袖い若ふのすれおらうそら^らのあぬいし
月^ああえ^れと^うふた^いじ^{たり}こ^らぬ^あり^けし

よかん^一の^一次^一 五^一折^一

い^しり^のあ^のさ^のひ^のま^まに^には^はあ^のつ^の月^と部^との^我の^心
か^しい^れも^とふ^つは^らき^り

か^し錦^のや^に日^の若^たり^とそ^のふ^せよ^とう^今ら^道ぬ^れ

そ^し先^て人^よは^はら^うき^り

今^はそ^のふ^たの^葉れ^のら^りそ^のひ^のく^のよ^をみ^る
そ^のふ^たを^見て^つは^らき^り

紙貫^一

た^かめ^をあ^ぬら^ぬれ^あや^しい^とも^人の^心の^つら^さ
の^あら^わぬ^はら^のつ^らさ^をみ^る
の^あら^わぬ^はら^のつ^らさ^をみ^る
あ^らわ^ぬは^らの^つら^さを^みる

よかん^一の^一次^一

今^はそ^のふ^たの^葉れ^のら^りそ^のひ^のく^のよ^をみ^る

人々の心はさういふに
してその心はさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに

さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに

さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに

さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに

さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに

さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに
さういふにさういふに

是の世はたゞて世なりん心もろよふそいふなり
世一人よもつんてんてんてんてん

平貞文

浪を鳥すの心よとれし心もろりきり家と
浪

世一人よもつんてんてんてん

世の世に心もろりきり家と
人

人よもつんてんてんてん

てきかたつてんてんてん

廣明権御

世一人よもつんてんてんてん

かくてとせく徳されし家ゆすり人あり世
いふをて又ありぬふこたつれはよ

をこせ徳きり よん人あり

とく徳のう徳物にはなるともかまをぬゆり

世一人

かまゆすりてんてんてん

あつてん

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. The text is written in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. The text is written in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page.



